



- 立科小学校／午前9時～午前11時30分  
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校／午後2時～午後5時  
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館／  
午前 11時50分～午後 1時40分  
電話 56-0303(直通)・有線 8888 (直通)  
(担当 指導主事 中島一彦)

指導主事だより

教育委員会

## なんだかうれしい

喜びや苦しみや涙の傍らに

立科中学校 蓼秋祭 成功裏に!

夏休み明け以降、各教室はもちろん、多目的室や音楽室、体育館から聞こえてくる学級や学年の歌声。校舎に入るたびに、耳に入ってくる歌声に心洗われるような、勇気がもらえるような、優しい気持ちになれるような豊かな感情が私自身の中に沸き起こっていました。

立科中学校の子どもたちと先生方の文化祭に向かう営みを感じつつ、迎えた23日、蓼秋祭2日目、合唱コンクール。子どもたちの取り組みの姿から学べたことがあります。

ひとつは、ひとり一人の皆さんが「一つの事に夢中になる」ということを経験したということ。

失敗しても、躓いても、何かうまくいかないことがあったとしても、とことん突き詰めていくという経験。それは、これからの人生で「あの時、あそこまでやったんだから」という記憶と共に自分自身を支えてくれる力になるはずです。

もうひとつ。それぞれが楽曲と出会い、それぞれの課題と格闘しながらも、歌う仲間と共歩きを続けたすごさです。ひとり一人が違う存在であるはずなのに、声質も、楽曲への思いも異なる中で、その仲間の声に自分を重ねようと、違いを認め合いながら、仲間の声に自分の声を重ね続けたこと、そういう素晴らしさ。異なるひとり一人と一緒に生き、何かをやっていくこと、一つの楽曲を創り上げていくこと、それは大変な時間や手間が必要で、だからこそ、かけがえのない尊いものだという事への気づきが、子どもたちの中に確かに生まれています。



合唱祭終了後、指揮台に立ち、仲間たちの先頭に立った指揮者の子どもたちに声をかけてみました。

一年生の清太朗君は歌と指揮のズレを周囲の子どもたちに詫言っていました。「大丈夫、そんなことなかったよ」と励ます仲間たち。共に取り組み続けた爽やかさが伝わってきました。二年生の佐藤山和君は、「楽曲を完璧にマスターしたこと」「楽曲と一つになったんだよ」と誇らしげに語ってくれました。仲間たちの声と自分の捉え続けた曲想を懸命につなごうとした山和君のものがきの素晴らしさが伝わってくるのです。「楽曲と一つになる」そんな思いから見えてくる山和君の没頭の日々。それぞれの指揮者、伴奏者たちもまた仲間たちの歌声を引き出し、自分の曲想と重ねようと必死にものがき続けていました。かけがえのないつながりが生み出されているように思えるのです。



## 煌めき・そして 確かな足跡

合唱の最中に、先生方の背中を見つめてみました。涙をぬぐう仕草、あふれる涙を懸命に抑えようと下を向く姿・・・背中が震える先生方。

懸命に歌い上げる我が子たちにどう寄り添い続けるのか、出会った我が子たちと共に歩み続ける、共に学び続ける教師としての自分を確認しているようにも思ってきました。それは参観の保護者の方々も同様です。子どもたちの歌い上げる姿に寄り添い続けようとする父母や教師。自立した大人として歩み出した我が子たちの存在にどうかかわるか。

尊厳のある・奥行のある人間として生きる子どもたちに触れ、喜びや悲しみの涙やその思いの中で生きようとする父母の姿こそ、子どもたちの背中を押すということなのではないか、そう思われるのです。